

T A N E G A S H I N A



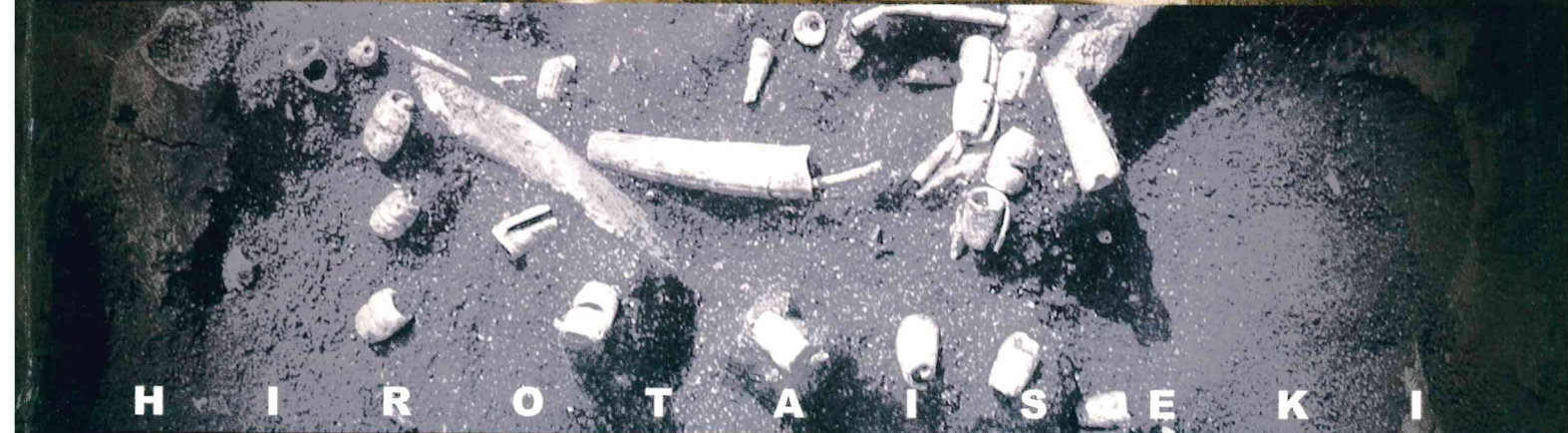
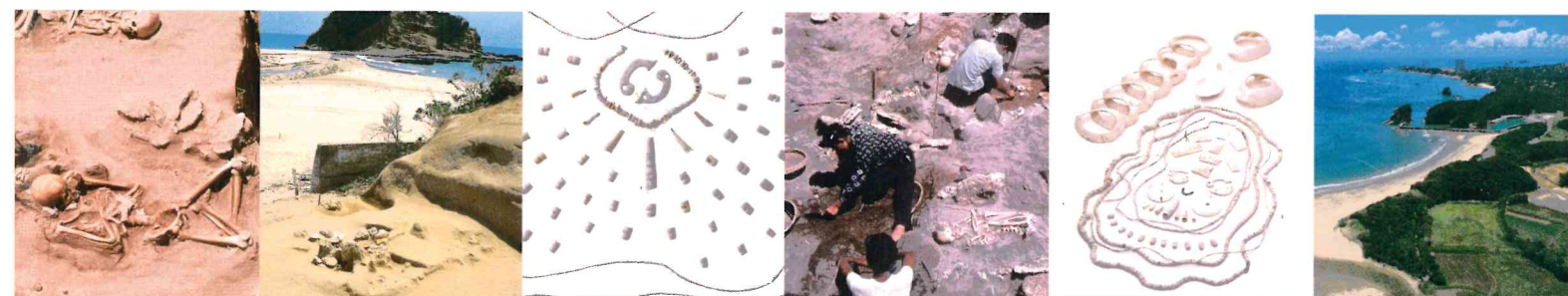
国史跡指定記念 広田遺跡シンポジウム



# 広田遺跡の謎に迫る。

平成20年9月21日(日) 14:00~17:00(13:30開場)

場所:南種子町福祉センター



H I R O T A I S E K I

主催:南種子町教育委員会・南種子町 後援:鹿児島県教育委員会



国史跡指定記念 広田遺跡シンポジウム

# 広田遺跡の謎に迫る。

日時 平成20年9月21日(日) 14:00～17:00

会場 鹿児島県熊毛郡南種子町 南種子町福祉センター

## シンポジウムの日程

### オープニング

14:00～14:10 郷土芸能「ちくてん」 平山小学校児童

### 開会あいさつ

14:10～14:13 南種子町長 名越 修

### 第一部

14:13～14:33 広田遺跡の紹介 南種子中学校生徒

14:33～14:38 今後の広田遺跡の活用・史跡整備について 南種子町教育委員会

14:40～15:20 基調講演「貝の道からみた広田遺跡」 熊本大学教授 木下 尚子

### 休憩

15:20～15:25

### 第二部

15:25～15:45 広田人のファッションショー 南種子高等学校生徒

15:45～15:50 表彰

### 第三部

15:50～17:00 パネルディスカッション

司 会：堂込 秀人（鹿児島県文化財課）

パネリスト：木下 尚子（熊本大学教授 考古学）

高瀬 要一（奈良文化財研究所客員研究員 史跡整備）

宇多 高明（財）土木研究センター 海岸工学）

竹中 正巳（鹿児島女子短期大学准教授 形質人類学）

中村 直子（鹿児島大学准教授 考古学）

榎直田 佳男（文化庁文化財調査官 考古学）

徳田 有希乃（南種子町教育委員会）

石堂 和博（南種子町教育委員会）

### 閉会のあいさつ

南種子町教育委員会 教育長 岩屋 秀男

## 目次

シンポジウムの開催にあたって .....	1
シンポジウムの趣旨 .....	2
広田遺跡を発見した人々 .....	3
出演団体の紹介 .....	4
広田遺跡の紹介 .....	8
基調講演 .....	12
パネルディスカッション .....	14

## シンポジウムの開催にあたって



本日は、「広田遺跡国指定記念シンポジウム～広田遺跡の謎に迫る。～」を開催しましたところ、多数の方々にご参加いただき誠にありがとうございます。

私たちの南種子町は、南西諸島と日本本土との境界地点に位置し、黒潮と貿易風を利用した海上交易の要所として、「鉄砲伝来」や「赤米の伝播」など日本の歴史上重要な出来事の舞台となりました。また、数多くの歴史遺産が残されていて、県内最古の遺跡の一つである県史跡「横峯遺跡」の調査からは、約3万年以上前から人々がこの地で生活を営んでいたことが分かっています。

国史跡「広田遺跡」は、今から約1,700年前の墓地遺跡です。この遺跡は、1955年の台風22号の際に、地元に住む齊藤貞夫・長田茂・坂口喜成氏によって発見され、1957年から1959年にかけて盛園尚孝・国分直一氏らによって学術調査がなされました。調査の結果、4万点以上の貝製の装身具と157体をこす特徴的な人骨が見つかり、全国から注目を集めました。その後、2004年度から南種子町教育委員会がこの遺跡を保護するための調査を行い、2008年3月28日に種子島で唯一、国の史跡に指定されました。

本日のシンポジウムでは、この広田遺跡のもつ謎に迫るため様々な分野の専門の先生方にお越しいただいております。また、この遺跡に興味関心をもった町内の児童生徒の皆さんが、「伝統芸能」「ファッションショー」「学習発表」といったそれぞれ異なる方法で、この遺跡から感じたことを表現いたします。本シンポジウムが、郷土の豊かな歴史に興味を深めていただくきっかけの一つとなれば幸いに存じます。

最後に、このシンポジウムへの出席をご快諾いただきました先生方や出演者の皆様、ご後援いただいた鹿児島県教育委員会及びご協力いただいた南種子町青年団及びジュニアリーダーの皆様、厚くお礼申し上げますとともに、ご参加いただきました皆様のますますのご健勝と今後のご活躍をご祈念申し上げます、開催の挨拶といたします。

南種子町長 名越 修

## シンポジウムの趣旨



国史跡「広田遺跡」は、今から約 1,700 年前の集団墓地です。

ここに埋葬されていた私たちの祖先は、南の海で採れる大型の巻貝に、不思議な文様を彫刻した美しい貝のアクセサリーを身につける独特の文化と、日本列島の他の地域の人々とは著しく異なる身体的な特徴（特徴的な抜歯、平均身長が大変低いなど）を持つ人々でした。

この独特の文化を持つ人々はどこから来て、どこへ消えて行ったのか・・・この謎に多くの研究者が強い関心をもち、数多くの論文が発表されています。

本シンポジウムでは、広田遺跡を学術的な立場から研究されている先生方にご出席いただき、その謎に迫ることを第一の目的としています。

もう一つの目的は、このシンポジウムを、できるだけ多くの皆様方に実際に参加してもらう「参加型のシンポジウム」にすることです。

今回のシンポジウムを企画した当時、私たちは、研究者の先生方だけでなく、町民の皆様方や子供たちが、この遺跡のもつ古代のロマンに強い興味関心を抱きはじめていることを感じました。

「僕たちの足元に、僕たちの祖先の歴史が埋まっているってびっくり。」

「広田人は、とてもファッショナブルな人たち。私もきれいな貝のプレスレットをつけてみたい。」

「広田遺跡を最初に発見したのは、郷里の先輩である広田の青年団の人たちであることを知り驚きました。」

こうした子供たちや町民の皆様方が感じた様々な思いを、シンポジウムで形にできればと願い、企画をすすめてまいりました。

今回のシンポジウムでは、オープニングで広田遺跡のある平山小学校の児童が、琉球から伝わったとされる伝統芸能「ちくてん」を披露し、また会場入り口には、触れて体験できる展示コーナーを用意いたします。

また、南種子高等学校の生徒が、広田の貝文化を、ファッションショーで表現し、南種子中学校の生徒は、謎の多い広田遺跡について調べたその成果を発表いたします。

そして、青年団とジュニアリーダーの皆様方が、これらの発表の音響・照明・演出などを担当いたします。さらに、会場に来られた皆様方にも参加していただければと願い、パネルディスカッションでは、皆様方からご質問をいただく時間を用意しております。

本日の催しが、皆様方と一緒に古代のロマンに「見て、触れて、語り合う」場となり、私たちの郷土をより深く理解するための一助となれば幸いに存じます。

南種子町教育委員会 教育長 岩屋 秀男



# 広田遺跡を発見した人々

## 広田に込められた想い

1955（昭和30）年9月29日、台風22号による高波によって、広田の海岸にある砂丘の一部が崩れ、1,700年もの間、砂に埋まっていた古代のお墓が姿を現しました。

台風の次の朝、広田集落の三人の若者（斉藤貞夫さん、長田茂さん、坂口喜成さん）が広田の砂浜を歩いていると、崩れた砂丘に、美しい彫刻が刻まれた貝のアクセサリー、古人骨、土器などが散らばっているのを発見しました。そして、みかん箱にそれらを詰め込むと、中種子町の西病院に持ち込みました。そこで、考古学者の盛園尚孝氏（当時、野間中学校教諭）によって鑑定がなされ、盛園氏はこれまで見たことのない不思議な文様の刻まれた貝製品に驚き、この遺跡が、きわめて貴重な遺跡であることに気がつきました。

第一発見者の三人は、このときまだ20代の青年でした。斉藤貞夫さんは、この発見の1年前、昭和29年に、この砂丘ですでに古い頭蓋骨をみつけていました。また、長田茂さんは、歴史が大好きな青年で、後日、平山郷土文化保存会という平山の歴史文化を調べ、守り伝えていく団体の中心的なメンバーとなり、広田遺跡の保存と普及啓発に尽力しました。そして、坂口喜成さんは、当時、平山地区の青年団長として、青年のまとめ役だったのです。

この遺跡の発掘調査は、1957（昭和32）年に、考古学者の盛園尚孝氏と国分直一氏（後、熊本大学教授）らが、また、その後、金関丈夫氏（後、九州大学名誉教授）らが加わって、1959年まで3次にわたって行われました。この調査の成果は、毎日新聞の全国版で報道され、日本考古学協会で学術発表がなされ、この遺跡が、日本では他に類例がない特徴的な遺跡であることから全国的に有名となりました。実は、この発掘調査には、町内の青年がボランティアで多数参加しています（※1）。

この後、発掘調査に参加された地元の方々や、平山郷土文化保存会などが中心となって、昭和40年に、現在の広田遺跡公園の場所に広田遺跡の顕彰碑を建立し、その序幕を長田茂さんが行いました。また、顕彰碑の近くには、古代遺跡を人々にわかりやすく伝えたいとの思いから、茅葺屋根の小屋をつくるなど、広田遺跡を身近に感じてもらうための努力をされました。

広田遺跡は、昭和30年代に、その当時の南種子町の若者たちによって発見されました。発掘調査がなされた後も、地域の人々によって、大切に守り伝えられてきました。そして、平成20年3月28日、広田遺跡は「国史跡」に指定されたのです。

※1：1957-1959年の発掘調査日誌には、以下の方々が調査に参加されたことが記されています。

山田てる子、山田安夫、山田修、山田静夫、山田又富、山田正信、山田茂、長田茂、長田律子、長田美雪、長田つよし、長田けい子、長田仙平、長田勝、長田保、長田隆郎、長田勲、中島安子、中島シン子、向井喜昭、向井長助、向井英樹、向井いつ子、向井晃、向井いち子、向井三千代、原浩子、原正信、原美保子、原くニ子、鮫島二雄、鮫島和夫、坂口久子、羽生敏子、徳永輝太郎、榎本忠男、平瀬政夫、古田たか子、西銘久吉、和田修、西田賢一、雨田照夫、雨田勇進、石堂安雄、岩坪正美、永岩たつみ、平島典男。その他名前不詳の方々：徳永、長田、小田、向井、石堂、堂原、中川、山元、鎌田、村田各氏

## 出演団体の紹介

### 南種子町立平山小学校

平山小学校では、小学校・校区合同秋季大運動会において校区内の四集落に伝わる郷土芸能を踊っており、昨年からは、広田遺跡のある広田集落に伝わる「ちくてん」を披露しています。



「ちくてん」の由来については、様々な説がありますが、一説によると次のようなことが言い伝えられています。



今から 160 年～ 170 年昔、広田沖で琉球王国の船が難破しました。広田集落の人々は、異国の人を看護・救済し、船を修理するため現在の広田港沿の阿武鋤川<sup>あぶすき</sup>上流へと運びました。乗組員の中に一人だけ朝鮮国の人<sup>あぶすき</sup>がいて通訳をしてくれたので、船を係留し修理をしたと言われる場所を今でも朝鮮淵とよんでいます。



さて、その頃の広田集落では“岩穴”<sup>いわな</sup>（岩肌に横穴を掘り、その中で火をたき穴全体を温めた後、岩の中に入り、入口にふたをして体を温めるという寒い日の憩いの場・・・現在のサウナに似ている）を造っていました。岩穴の完成の祝賀の席に乗組員たちも招待され、宴は盛り上がりました。その際、乗組員たちが感謝の気持ちを込めて踊ったと伝えられているのが「ちくてん」です。その踊りを見た広田の人々は大変気に入り、踊りを教えてもらいました。しかし、歌については、言葉が違うので、耳で聞いたままを日本語に置き換え歌ったことから、単語としてはわかるものの、前後を考えあわせても意味が通じないままに歌い継がれています。



今回、広田集落の有志の方々のご指導を受けながら、今日まで練習してきました。まだまだ不十分な所もありますが、一生懸命踊りますので、どうぞご覧下さい。



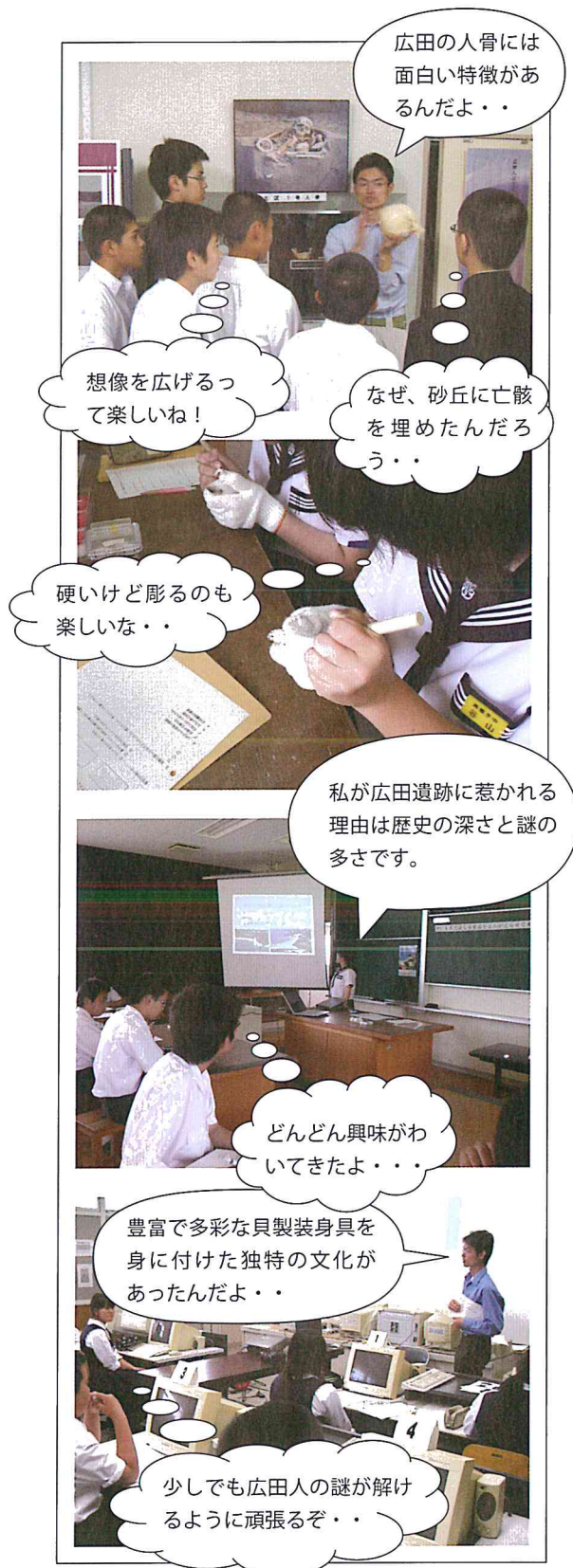
体育館での練習風景



平山小・校区合同秋季大運動会



# 南種子町立南種子中学校



3年生選択社会と2年生選択美術のメンバーで取り組みました。

調べ学習を進めていくと、私たちは広田遺跡について「知っているようで知らない」ことが多くあることがわかりました。私たちが住んでいる町内に、このような素晴らしい遺跡があることに改めて驚き、もっと知りたい・もっと知って欲しいと思うようになりました。

私たちは、広田遺跡の概要や、広田人骨の特徴、広田人はいつ消えたのか、広田遺跡の文様文化について調べました。また、実際に多数出土している貝製品の文様をよみがえらせようと、同じ貝を用いて、実際に彫る作業もやってみました。実際にやってみると、とても難しく、広田人の技術や思いには何か深いものがあるのではないかと思います。

日本の歴史の中で、どこの遺跡にも見られない風習があるなど、広田遺跡はとてもおもしろい遺跡です。私たちの先祖の可能性もある広田人のことをさらに解明していきたいと思います。

## 発表内容

- 1 広田遺跡の概要
- 2 広田人骨の特徴
- 3 広田の文様文化
- 4 広田人はいつ消えたのか



# 鹿児島県立南種子高等学校

私たちの高校は普通科高校です。そのため、被服の実習経験が浅く、自分たちの力でファッションショーを行うことが出来るのか、とても不安でした。服のデザイン、アクセサリー作り、ファッションショーの企画・構成…すべてが初めての経験でした。でも、町の教育委員会の方や洋裁の先生方にご指導をいただけたので、何とか準備を整えることができました。



また、今回のシンポジウムに参加することがきっかけとなり、広田遺跡を中心とした地元の歴史や文化をより深く学びましたし、エコバッグを製作する過程で、リサイクルやゴミ問題について考えたり、有意義な時間を過ごすことができました。



今日は、私たちが試行錯誤しながら学んだことを十分に表現したいと考えています。来場された皆さんにも私たち高校生の視点を楽しんでいただけたらうれしいです。

## 発表内容

### 1 製作過程の紹介ビデオ

### 2 広田ファッションショー

「ビーチリゾートファッション」  
紹介するすべての製作品に、広田遺跡特有の貝製品の文様や形を取り入れています。

① 参加形態 2年生21名(2学年在籍者50名)

※「総合的な学習の時間」選択コースの一つ。

② 活動時間 1学期の授業 約10時間

※ 班によっては、個人や小グループで、放課後の活動も行った。



広田遺跡国史跡指定記念企画展見学(4/16)



衣装製作班…デザインを持ち寄り、検討中。



アクセサリー製作班…今や広田人の気持ち!



プロデュース班…ショーの構成を担当します。



## 南種子町連合青年団



青年祭で地元の郷土芸能を披露



商工会のみなさんとのボランティア活動



地元の高校生との交流スポーツ大会

みなさん、こんにちは。私たちは南種子町連合青年団です。

青年団とは、大雑把に言えば、「わっかしい〜」の集まりです。今年で発足 63 年目を迎え、現在 37 名の団員で活動をしています。



偉大な先輩方に叱咤・激励されながら、日々「今、自分たちが本当にしたいことは何なのか？何をすべきなのか？」を団員 1 人ひとりが考えながら地域に根ざした活動の展開を目指しています。



活動としては、ボランティア、各種行事のスタッフ等で、自主活動の主たるものとしては交流活動を展開しています。様々な方々と触れ合うことで、視野を拡げ、考え方を学び、自己形成・向上の糧としています。



今回、広田遺跡が国の史跡指定を受けましたが、広田遺跡を発見するきっかけとなった人骨を最初に発見したのは、当時の青年団員であったとお聞きしています。また、昭和 32 年から 34 年にかけて行われた発掘調査に当時の青年団の方々もボランティアとして参加したそうです。



そういった意味でも私たち青年団は歴史と伝統のある団体です。私たちはその功績をたたえるとともに、先輩方に負けぬよう精進し、後世に引き継いでいきたいと思えます。



今回はシンポジウム開催にあたって、青少年のリーダーとして小中高生の発表の音響、照明などの舞台演出を担当します。



広田遺跡の国史跡指定、誠にありがとうございます。



# 広田遺跡の紹介

## はじめに

広田遺跡は出土品が国の重要文化財（平成 18 年 6 月 9 日付）、遺跡が国史跡（平成 20 年 3 月 28 日付）に指定されています。このように二つの国指定を受けた遺跡は、鹿児島県では霧島市上野原遺跡に次いで 2 例目です。南種子町のかげがえのない貴重な広田遺跡について紹介いたします。



図1 広田遺跡の位置

## 1 広田遺跡の位置

広田遺跡は南種子町平山広田にあります。東海岸に面した長さ約 100 メートルの砂丘に立地し、砂丘北側を広田川が東流し海へと注いでいます。広田周辺は標高 20 メートル前後の丘陵が発達しており、丘陵間の低地部に沿って広田川が流れ、集落や水田が広がっています。



写真1 昭和30年代の発掘調査時の広田海岸

## 2 広田遺跡発見の経緯

1955（昭和 30）年、大型台風 22 号による高波で広田の砂丘が一部崩落し、人骨や貝製品、土器などが海岸に散乱しました。それを広田集落の斉藤貞夫さん、長田茂さん、坂口喜成さんらが発見し、中種子町の西病院を通して当時、野間中学校教諭であった盛園尚孝先生が確認したことから遺跡の発見へとつながっていきました。

広田遺跡の発掘調査は、国分直一先生、金関丈夫先生、盛園尚孝先生らを中心に、1957-1959 年（昭和 32-34 年）の 3 年間行われました。発掘調査には、青年団をはじめ地元の方々が多く参加しています。



写真2 昭和30年代の発掘風景

さらに、2005 年（平成 17 年）3 月、大雨により広田の砂丘北端部が崩落し、貝輪を装着した状態の人骨が露出しているのを西之表市在住の考古学者鮫島安豊さんが発見し、南種子町教育委員会に連絡しました。これまで、砂丘北側では当時の人々の食べカス（獣骨や魚骨、貝殻など）の存在は確認していましたが、墓域ではないと考えられてきました。しかし、今回貝製品を伴う人骨が発見されたことで、砂丘の北側にも墓域が広がる可能性が生まれました。





写真3 平成の発掘風景

砂丘北側は広田川に面しており、川の増水時には崩壊する危険性がありました。こうしたことから、2005-2006年（平成17-18年）、南種子町教育委員会は保護を目的に遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施しました。調査の結果、従来墓域と考えられていた南側の墓域が西側に拡大すること、砂丘北側に新たな墓域が存在することが明らかとなりました。さらに、電磁波で地中の埋蔵物を調べることができる地中レーダー探査を併せて行っており、墓の可能性を示す反応を確認しています。こうしたことから、広田の砂丘にはまだ未調査の墓が残存すると考えられます。



写真4 地中レーダー探査による調査

こうした調査成果から、広田遺跡は日本文化の多様性を知る上で重要な遺跡であると考えられ、平成20年3月28日国史跡に指定されました。

### 3 広田遺跡ってどんな遺跡？

#### 1) 時期について

広田遺跡は、弥生時代後期後半から古墳時代にあたる、およそ1,700年～1,300年前に作られた集団墓地の遺跡です。90基以上の墓と157体の人骨が発見され、埋葬に伴う貝製品やガラス玉、

土器などが44,000点以上出土しました。D地区2号人骨のように10,000点以上の貝製品を伴い埋葬されていた例もあり、このようにたくさんの精巧な貝製品を伴う遺跡はほかにありません。

広田遺跡は約400年間墓域として営まれてきましたが、大きく三時期に分けられます。

- ・ 下層期・古段階（弥生時代後期後半～古墳時代前期）
- ・ 下層期・新段階（古墳時代前期～中期）
- ・ 上層期（古墳時代後期）

#### 2) 墓制について

広田遺跡の墓は、墓穴の上にサンゴ石や丸い石を置き墓標とします。石の並べ方は様々で、墓穴全体を覆う覆石タイプや馬蹄状配石タイプ、箱形石柵タイプのほか、石を全く置かないタイプの墓もあります。墓穴上面に石を配置する墓を、考古学では覆石墓といいますが、覆石墓は当時の種子島で流行した埋葬形態であり、中種子町増田の鳥ノ峯遺跡などでも確認されています。

また、時期により墓の形態も異なります。下層期・古段階は、一つの墓に一人埋葬されましたが、上層期には板状のサンゴ石で囲いをつくり、その中に複数の遺体を合葬・集骨しました。集骨の中には、焼けた骨の小片もみられました。

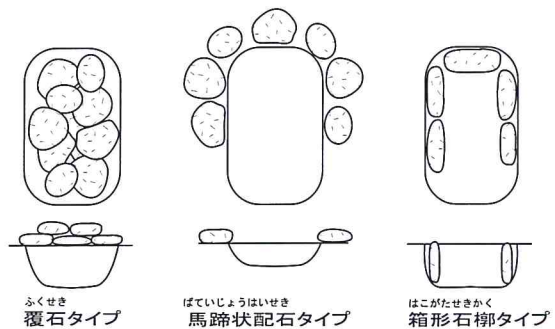


図2 下層にみられる墓の種類

#### 3) 広田人はどんな人？

広田遺跡から発見された人骨は、平均身長が成人男性で154cm、成人女性で142.8cmです。当時の北部九州弥生人の成人男性の平均身長は163cmですから、広田人はとても小柄な人たちだったと言えます。

また、出土したほとんどの人骨は後頭部が扁平な絶壁頭をしていました。広田人は道具を使って意図的に頭蓋骨を変形させていた可能性があり、こうした習俗を持つ人々は日本では確認されていません。



さらに、出土した人骨の多くは、健康な歯を抜く抜歯をしていました。広田人の抜歯は上あごの側切歯や犬歯を1本だけ抜く珍しい抜歯方法です。抜歯は成人儀礼だったと考えられており、広田人もこうした成人儀礼として行っていたのでしょうか。

#### 4) 広田遺跡の出土品について

広田遺跡に埋葬されていた人々は、装飾された美しい貝のアクセサリーを伴い埋葬されていました。こうした貝製品の中には、種子島より南の沖縄や奄美近海で採集される大型巻貝を使用してい

るものも多く、当時南島地域と交流していたことを示しています。

広田遺跡の貝製品は、日本でほかに例がないといえるくらい精巧なものが多く、当時の製作技術の高さをうかがわせます。ここで代表的な貝製品を紹介します。

「山の字」貝符は、1958年（昭和33年）の第二次調査で発見され、当時は日本最古の文字の発見と大きく新聞でも報じられ、話題となりました。以後、山の字説と文様説との間で様々な論争が繰り広げられましたが、現在も決着がついていません。

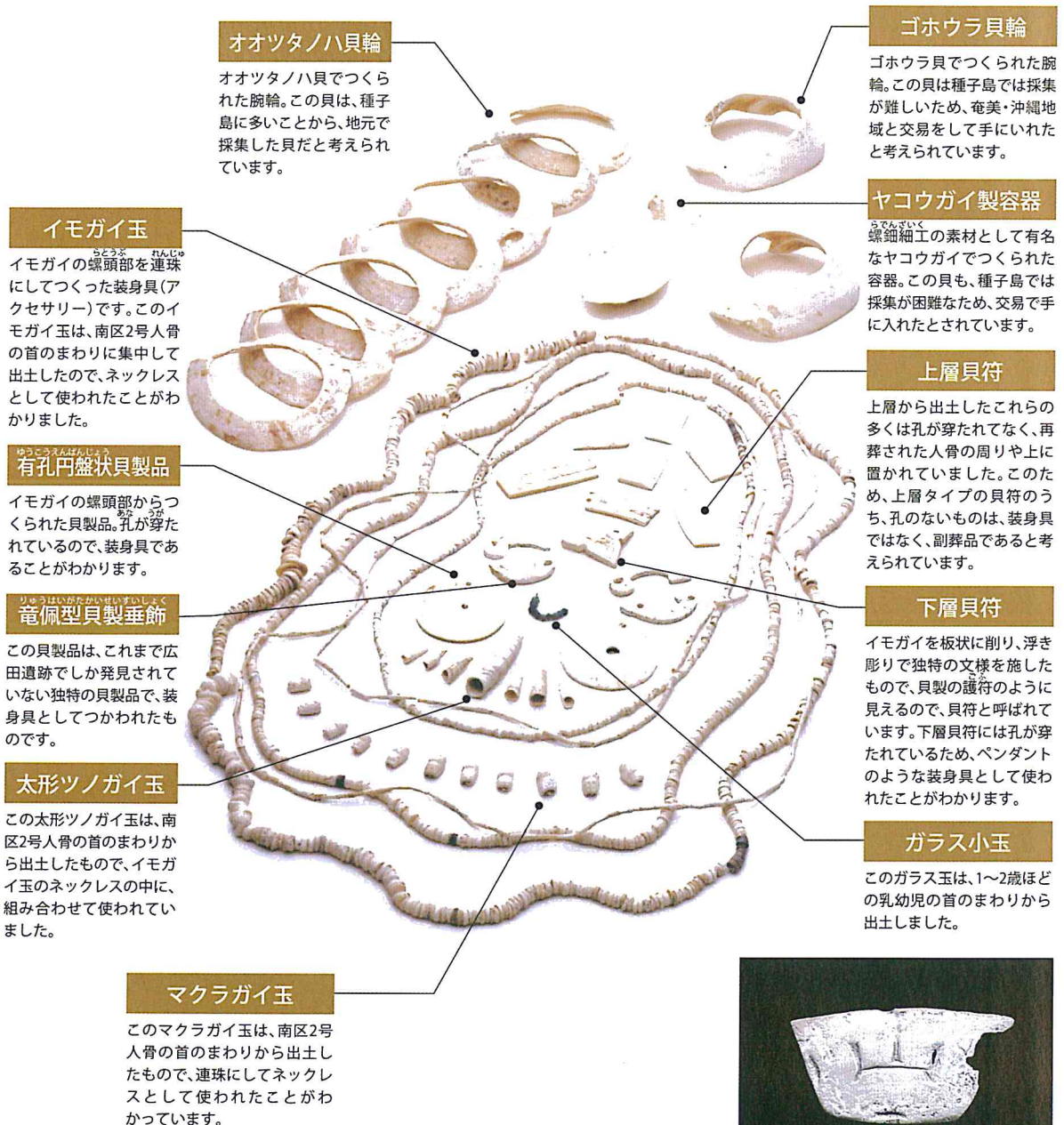


写真5 2005-2006年 広田遺跡出土の貝製品



写真6 「山の字」貝符



広田遺跡からは、墓に伴い土器も出土しています。北側墓域の北区2号墓からは、種子島で作られたと考えられる在地のかめがた甕形土器と壺形土器と一緒に出土しました。土器は遺跡の年代を考える上で重要な遺物です。北区2号墓では壺形土器（中津野式土器といいますが）が出土していることから、弥生時代終末期に作られたことがわかりました。さらにこの壺形土器は本土からの搬入品と考えられ、本土と交流していたことを示しています。



写真7 北区2号墓から出土した土器

このように、広田遺跡の出土品は南島地域から本土にかけての交易を考えるうえで非常に重要だと考えられ、平成18年6月9日、国の重要文化財に指定されました。

#### 4 当時の環境

広田の砂丘は最も高いところで標高約9メートルありますが、2005-2006年（平成17-18年）の発掘調査により、この砂丘は弥生時代に入ってからできたことがわかりました。当時は広田川が砂丘によりさえぎられ、海岸とは反対側の砂丘の背後に湿地ができていたと考えられます。

また、砂丘北側で、弥生時代中期頃、当時の人が食べた動物や魚の骨、貝殻などが見つかります。こうしたことから、当時の人々は狩猟や漁業、貝の採集などを行う一方、地形を利用して湿地に稲作を行っていたのかもしれません。

現在の広田遺跡とその周辺環境は、森林が繁茂し背後の湿地では水田が、丘陵部では畑が作られています。こうした風景は広田遺跡が作られた当時からほとんど変わっていないと考えられます。広田遺跡とその周辺は当時の環境を良好に残しているといえるでしょう。

#### 5 広田人のルーツ

広田人のルーツは謎に包まれています。種子島では、広田遺跡より古い時代に大量の装身具を伴う遺跡は発見されていません。日本列島全体でもこれほど多くの装身具を伴う遺跡はありません。そのルーツはどこにあるのでしょうか。

研究者の中には、下層貝符の文様が古代中国の青銅器に施された文様にとっても似ていることから、古代中国文化の影響を強く受けていると考えている人もいますが、いまだ解明されていません。

広田人は約400年間、広田の砂丘という限られた空間を墓域として使用していましたが、現在に至るまで当時の集落跡は発見されていません。集落の発見は広田人のルーツを探る大きな鍵となります。南種子町教育委員会では、2004年（平成16年）に遺跡の周辺調査を行っており、今後も継続して調査を続けていきたいと考えています。

#### 6 広田遺跡の今後の整備・活用について

広田遺跡は、海と川にはさまれた砂丘に立地しているため自然災害の危険性が高く、遺跡が壊れることがないように整備していく必要があります。南種子町では今年3月、遺跡を保護するために広田川に面した砂丘北側に護岸を建設しました。今後も専門家の先生方に指導いただきながら保護していく予定です。



写真8 2005年9月 台風により崩落した砂丘の復旧作業

国史跡広田遺跡は、南種子町にとってかけがえのない貴重な遺跡として保護していくことはもちろんですが、種子島のルーツを探るための貴重な研究資料であり、観光資源ともなりえます。遺跡の活用についても専門家の先生方に指導いただきとともに地元の皆さまの意見・協力をいただきながら充実させていきたいと考えています。



# 貝の道からみた広田遺跡

木下 尚子 (考古学)

熊本大学教授

古代東アジアの貝製品から貝にかかわる文化や交易を研究している。広田遺跡の貝製品から広田人の謎に迫る。



## はじめに

弥生時代から古墳時代にかけてのおよそ 1300 年間、九州と琉球列島の間には、島づたいに延びた 1200km の交易路—貝の道があった。交易されたのは、サンゴ礁の海に育つ大型の巻貝類で、九州人はこれで特別な腕輪や高級な馬具を作った。この貝の道のただ中に登場し、交易の後半期に大型巻貝を大量に消費したのが種子島広田人であった。

### 1 種子島という舞台

- ・ 温帯の南端、亜熱帯の隣
- ・ サンゴ礁の始まり (エプロン礁)
- ・ 九州の文化が強いが、琉球列島の情報もはいる (縄文時代晩期)

### 2 弥生時代の貝の道

#### ■ 貝交易のきっかけ

北部九州・山口西部の弥生人が大型巻貝で農耕祭祀のための特別な腕輪をつくり、これが流行して需要が高まった。

#### ■ 交易された貝殻と用途

ゴホウラ・アツソデガイ (どちらもスイショウガイ科) : 男性用腕輪

アンボンクロザメ (イモガイ科) : 女性用腕輪、馬具の装飾

#### ■ 貝交易の実際

前半期 : 北部九州・山口西部の弥生人が西北九州沿岸部の弥生人に運搬を委託。弥生人が琉球列島を南下する。貝殻がそのまま運ばれる。

後半期 : 南九州弥生人と奄美人が連携してリレー輸送。腕輪の形に粗く加工されたゴホウラなどが運ばれる。

## ■ 種子島と貝の道

- ・ 広田遺跡に山口県西部の特徴をもった弥生土器 (壺) が残される。←→ 交易品のはいった入れ物だったか?
- ・ 阿嶽洞穴遺跡 (中種子町) で、北部九州弥生人の使うゴホウラ腕輪が出土。腕輪の模型を運んでいたのか?

⇒ 種子島は弥生の貝の道の立ち寄り地

### 3 貝の道の谷間に登場した広田遺跡

古墳時代には大型巻貝の消費者が九州人から近畿人 (ヤマト朝廷) に変化する。弥生時代終末期は消費の谷間にあたる。

広田遺跡で貝殻の消費が始まるのはこの時期。オオツタノハとイモガイを消費し、本土の貝交易の影響をほとんど受けていない。

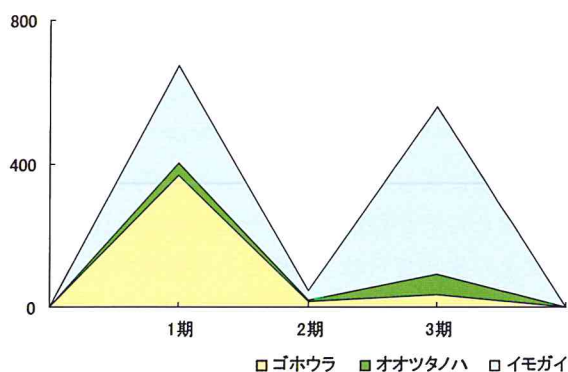


図1 九州・本州における南海産貝類の消費動向 (弥生時代～古墳時代 1275個)

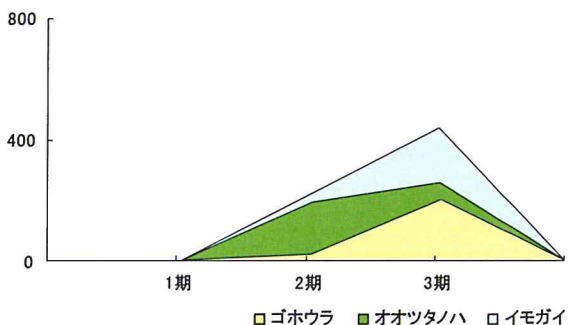


図2 種子島 (広田遺跡) における南海産貝類の消費動向 (弥生時代～古墳時代 662個)



#### 4 古墳時代の貝の道

- ・本土ではイモガイを主体とした消費が始まる（腕輪・馬具）。  
貝殻の運搬は南九州人・奄美人が継続して分担していた。奄美の土器が南九州のものに似てくる。

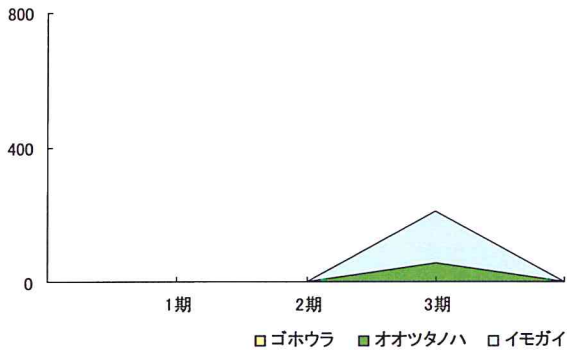


図3 豊後・日向・大隅における南海産貝類の消費動向 (弥生時代～古墳時代 208個)

- ・古墳時代の豊後・日向・大隅に新たな貝殻の消費が始まる（腕輪）。  
ここでは、オオツタノハの消費が多いことが特徴。またゴホウラ腕輪の形状が広田遺跡と同じ形になり、同じ変化をとげることも特徴。つまり、広田遺跡の影響がはっきりと認められる。
- ・広田遺跡には本土からガラス小玉やわずかな管玉がはいるほか、大きな影響は認められない。

#### 5 広田人の貝交易

- ・貝符がのこる遺跡:奄美大島、徳之島、沖縄本島、伊江島、久米島
- ・広田文化の影響が、琉球列島に部分的に及ぶ琉球列島に在地化した貝符が登場する。  
ヤコウガイ匙の柄の彫刻に貝符に共通したデザインが登場する。  
奄美大島の土器の文様に貝符に共通したデザインが登場する。  
⇒広田人はみずから琉球列島に向いて貝殻を採取した可能性が高い。

#### 6 まとめ

- ・弥生・古墳の貝交易において種子島は単なる寄港地にすぎなかった。
- ・二つの貝交易の谷間の時期に、これらの交易とはほとんど無関係に広田人の貝文化が登場する。
- ・広田の貝文化の影響は、東九州（腕輪）と奄美・沖縄（貝符）に及ぶ。しかしこれら地域の文化的影響は広田にほとんど及ばなかった。
- ・広田人は自ら南下して素材の貝殻を採取し、その消費は特徴的。  
⇒貝交易からみても、広田の文化は独自性が強く、展開は自律的である。

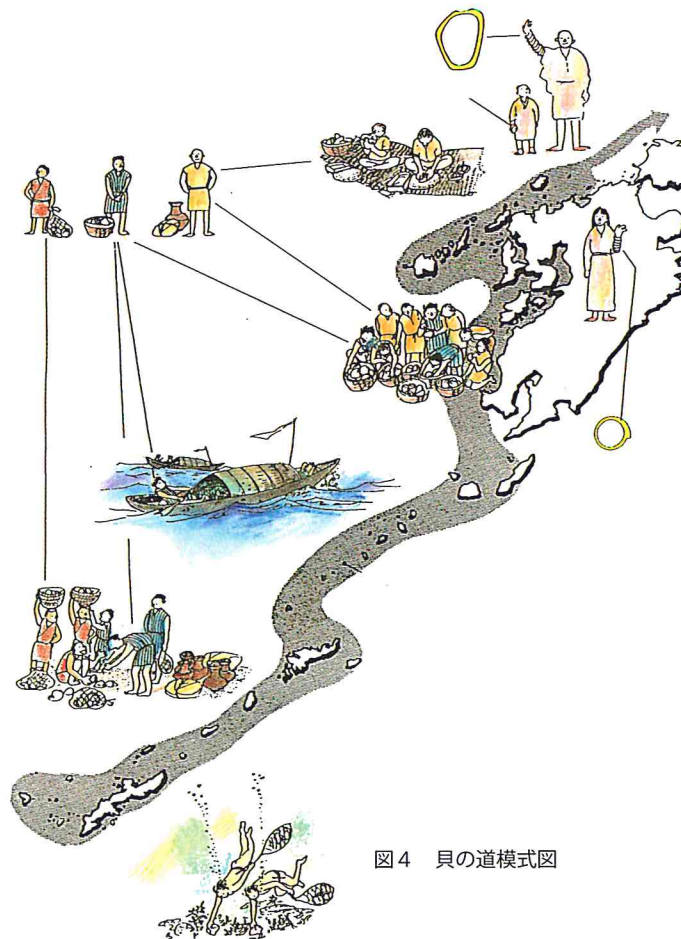


図4 貝の道模式図



# 広田遺跡から出土した土器について

中村 直子 (考古学)

鹿児島大学准教授

南九州の弥生～古墳時代の土器の文様や形を研究している。広田遺跡の土器から広田人の謎に迫る。



## はじめに

広田遺跡のお墓からは、華麗な貝製品などとともに土器が出土しています。そもそも土器は粘土で作った器で、「入れ物」として様々な場面で使われる道具ですが、その特徴や出土した様子を細かく見ていくと、ただの「入れ物」としてだけではなく、いろいろなことがわかってきます。ここでは、広田遺跡から出土した土器から当時の様子を探ってみたいと思います。

### 1 土器の種類と時期

広田遺跡の墓から見つかった土器は2種類あります。甕形土器と壺形土器です。甕形土器は煮炊きをするための土器です。現代の道具で言えばお鍋です。火にかけて使うため、外面にススがついていることが多くあります。壺形土器は、水などの液体や穀物などを貯蔵するために使われたと考えられています。

土器の時期は、弥生時代終末期から古墳時代だと考えられます。だいたい3世紀以降のものです。時期の決め手は、「中津野(なかつの)式土器」と呼ばれる壺です。中津野式土器は南九州一帯に分布する土器群で、弥生時代終末期に位置づけられています。そして、この壺と一緒に埋められた甕が、図1です。甕には、外面に文様がつけられています。幅の広い粘土帯を廻らし、2には、さらに6か所に下に伸びる短い粘土帯を貼り付けています。粘土帯には太目の線が刻まれています。新しいタイプになると、粘土帯が狭くなったり、刻み目を施したり、さらには粘土帯がなくなって、土器の表面に直接、細い直線的な文様を施すようになるという変化が見られます(図2)。この一番新しい段階の文様が古墳時代のある時期に当たるだろうと推定されています。

この時代の九州と広田遺跡の土器の種類を比べると、広田遺跡の土器の種類はとても少ないことがわかります。これは広田遺跡だけでなく、種子島から出土しているこの時期の土器を見てもそうです。九州の土器には、甕形土器や壺形土器のほかに、高杯やいくつかの種類の鉢などがあり、食器として使われていた土器が含まれています。このことから、種子島では食器として土器はほとんど使用していなかったということが推定されます。代わりに、木製品などを使用していたと思われます。現代の日本では金属製の食器を使うことは少ないですが、お隣の韓国ではステンレス製の食器をよく使います。このような習慣の違いが、九州と種子島の間にあったのだと思われます。

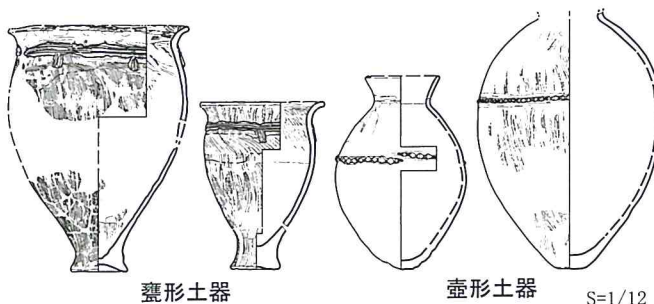


図1 2006年北区2号墓出土土器

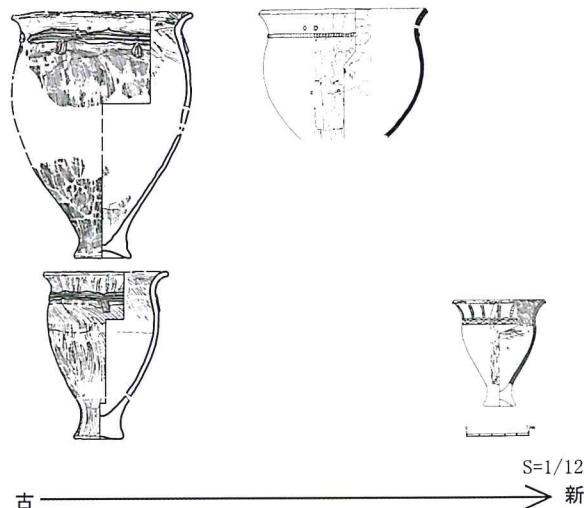


図2 広田遺跡出土の甕形土器の変遷(弥生時代終末期～古墳時代)



## 2 どこで作られたのか

広田遺跡の墓から出土した甕形土器は、種子島内で作られたと考えられます。理由は、種子島内ではよく似た特徴を持つ土器が出土しているのですが、大隅諸島以外の島外では出土していないからです。

一方、壺形土器は島外から持ち込まれたものがほとんどです。種子島産と推定される甕形土器と比較すると、甕形土器の胎土には金色の雲母が入っていて、土器の色合いも暗褐色で少し暗めなのですが、壺形土器の色調は白っぽく、雲母も入っていません。これは、粘土の性質が壺と甕で異なっている可能性がある事を示しています。それから甕形土器と壺形土器の表面の様子を比べると、甕の表面は粗い筋状の線が入っているのですが、壺はきれいになでて、つるんとしているか、細い筋状の線がつけられています。この筋状の線は、土器を焼く前に表面を整えるために木の板でなで、その板の木目の部分が筋状についたものです。専門的には、筋状の線のことをハケメと呼んでいます。甕と壺のハケメが異なるのは、表面をなでつけた板の種類やなでつけ方が異なっているため、土器作りの道具や手法が違うということがわかります。壺形土器についているハケメは、南九州本土のものと似ています。形や胎土もそうです。したがって、壺形土器は、南九州から持ち込まれたものと考えられます。

広田遺跡だけではなく、中種子町の鳥之峯遺跡や屋久島で出土している弥生時代から古墳時代の壺形土器はいずれも島外から、しかも九州で作られたものであると推定できる土器の特徴を備えています。種子島や屋久島では、主に甕だけを島内で作って、壺は島外から取り寄せていたということが言えるでしょう。

## 3 どのように使われたのか

広田遺跡の墓から出土している土器は、破片がほとんどです。お墓が重複して作られていることから、以前に埋められたり供えられたりした土器が、新しいお墓を作る時に砂と一緒に掘りあげられ、混ざりこんだ可能性もあります。そんな中、2006年の調査で発掘された北区2号墓からは、土器が良好な状態で出土しました(石堂他,2007)。土器は、弥生時代終末期のもので

お墓は、墓坑を石で覆っているタイプのものですが、長細い一個の石を墓標のように立てています。このように、石を立てて置くお墓を「立石墓」と呼びますが、このタイプのお墓は、種子島の他、指宿市や枕崎市などの薩摩半島南端部で確認されています。広田遺跡ではその石の上から甕形土器2点、壺形土器2点が出土しました。どちらも、大小のサイズの土器が対になっています。どれも壊れて出土しましたが、破片の重なり具合から、大型の土器は壊された後、その破片を重ねて石の上に置かれたものと推定できます。

弥生時代終末期において、立石墓に土器を供える風習はありますが、土器は広田遺跡のように壊れた状況ではなく、ほとんどが形をとどめたまま出土しています。墓前に土器に乗せたお酒や食べ物を供えた状況を留めているのだと考えられます。また、お墓に供えられる土器は、壺形土器や高杯などの食器の種類がほとんどで、広田遺跡のような煮炊き用の甕形土器が出土することはあまりありません。

お墓ではありませんが、指宿市向吉遺跡(渡部,1997)では壊れた土器をまとめておいている事例があります。円形に配置した石の並びの途中の穴に、埋められた状態で甕や高杯が出土しています。この遺跡は祭祀の跡だと考えられていますが、埋められた土器の種類は、甕と食器用の種類の土器でした。祭祀の時に食べ物の煮炊きをし、飲食をした後に埋められたのかもしれない。

広田遺跡の北区2号墓の場合もそれに似ています。甕形土器にはススが付着しており、煮炊きに使用したことがわかります。普段の生活に使用していたものをお墓に使った可能性もありますが、ひょっとしたら、埋葬する時などにお墓の近くで煮炊きをし、参加した人々が飲食した後に置いたのかもしれない。

広田遺跡の土器を見ていくと、種子島独特のもの、島外から取り入れる壺に代表するような、他地域との交流の結果生まれてきたものが垣間見えてきます。しかし、なぜ壺だけを島外から持ち込むのか、などの疑問も残されています。種子島では弥生時代終末期から古墳時代の集落遺跡がまだ見つかっていません。普段の生活の場である集落の遺跡を見つけて、より深く当時の種子島の人々の様子を知りたいと願っています。

文献

石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎(2007)『広田遺跡』南種子町教育委員会  
渡部徹也(1997)「鹿児島県指宿市向吉遺跡検出の祭祀遺構について—その成立背景と意義—」『人類史研究』第9号 221-234頁



## 広田遺跡から出土した人骨

竹中 正巳 (形質人類学)

鹿児島女子短期大学准教授

南九州～南島の遺跡出土の人骨を研究し、日本人のルーツをさぐる。広田遺跡の人骨から広田人の謎に迫る。



広田遺跡は南西諸島の先史時代を代表する埋葬遺跡の一つであり、これまでに160体を越える弥生から古墳時代にかけての人骨が出土しています。広田遺跡に埋葬された人々の特徴としては、短頭、低頭、低・広顔、低眼窩、広鼻、隆起した鼻根部、顔面の平坦性の弱さ、歯の小ささ、大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性が弱い点、体全体の諸径が小さく、推定身長が男性で154cm、女性143cm程度とかなり低い点などがあげられます。短頭、低顔という特徴は南西諸島で出土する縄文から古墳時代にかけての古人骨の多くに共通する特徴です。

近年、DNA分析や同位体分析など新たな研究手法が古人骨にも適用され、大きな成果を上げています。広田遺跡から出土した人骨についても、DNA分析や炭素や窒素の安定同位体比の測定に基づく食性分析が行われ、新たな知見が明らかにされています。DNA分析では3体の人骨からミトコンドリアDNAが抽出され、それぞれのハプログループは現代日本人の中で特別に珍しいタイプのものでなかったとの報告がなされています。同位体分析からは広田の人々は海産物を含む3種類以上のタンパク質資源を食料にしていたことが報告されています。

広田遺跡が営まれた時代の種子島に居住した人々の顔つきや体つきは、ほとんどの特徴が共通し、均質性が極めて高く、また、上顎の側切歯や犬歯を片側抜去するという風習的抜歯の形式も共通します。ただ、広田人の短頭性の強さは同時代の種子島の人々の中でも特筆されます。

沖縄諸島から出土する縄文から古墳時代にかけての古人骨は、抜歯形式が下顎の切歯を主体としており、種子島のそれと異なります。顔つきや体

つきの面でも、広田をはじめとする種子島の人々よりも頭の高さが高いなど細かい点で異なる部分もあります。また、沖縄諸島では、本土の縄文人と同程度の身長(158cm程度)や160cmを越える身長の人骨が出土する場合があります。同一遺跡内から出土した人骨に形質のばらつきが認められる場合があります。種子島と沖縄本島地区でなぜこのような違いが生じたのか、その理由を考えていくことは、今後の南西諸島の古人骨研究の一つの重要な課題です。それは広田の人々の成り立ち、南西諸島先史人と本土の縄文人との関係や当時の種子島、九州、沖縄諸島の人々の交流状況や活動範囲を考えることにも繋がってきます。

南西諸島は、古来、台湾や中国中・南部、あるいは東南アジアと日本を結ぶ文化的、人的な交流経路として重要な役割を果たしてきました。広田をはじめとする南西諸島の先史時代人に共通するサイズの小さい頭蓋、短頭、低顔、低身長という特徴の由来はどこに求められるのでしょうか。現状では、この問いかけに答えられるだけの数の先史時代人骨が南西諸島で出土していません。また、同時期の大陸をはじめとする近隣地域に目を向けても、同じ特徴をもつ多数の人々が居住した地域が確定されていません。

今後は、DNA分析や同位体分析など新たな科学分析と従来の計測や観察に基づく分析手法を古人骨研究に同時に用いることによって、南西諸島を含む日本列島の詳細な人類史の復元がさらに進行していくと思われますが、それらの研究と並行して、やはり南西諸島内における各時代各地域の古人骨資料の増加に努めなければなりません。

現在、種子島と沖縄本島地区の古人骨形質の時代的变化を比較・検討する研究に参加しています。

これは種子島だけでなく南西諸島の人々の成り立ちを解明するために必要な研究が行われています。種子島では、広田以降の中世および近世の人骨資料は揃ってきているにもかかわらず、縄文時代の人骨はこれまでに1体しか報告されていません。沖縄本島地区の縄文から近世にかけての人骨資料の充実度に比べると、種子島の縄文人骨資料の不足感は否めません。広田以前の縄文時代の種子島にどのような人々が居住していたのか、広田

遺跡を営んだ人々の由来を考える上でも縄文時代人骨を増加させなければなりません。

今年度と来年度、一陣長崎鼻遺跡（南種子町）の発掘調査が行われます。一陣長崎鼻遺跡は、種子島唯一の縄文人骨が出土した遺跡でもあり、調査成果が期待されます。

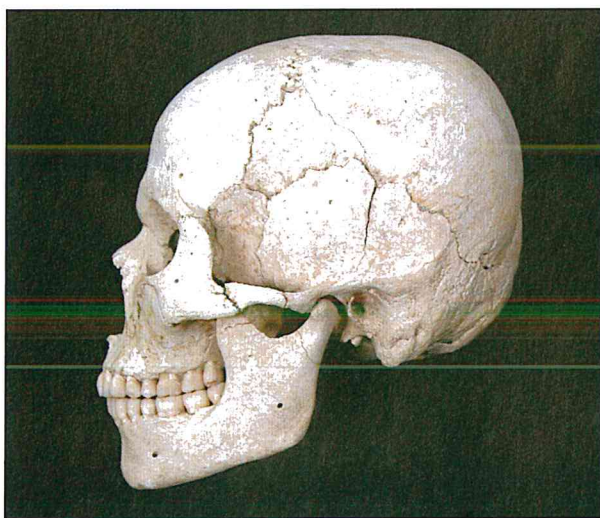


写真1 広田遺跡北区1号墓 男性壮年人骨頭蓋



## 鹿児島県の史跡の中の広田遺跡

堂込 秀人 (考古学)

鹿児島県文化財課

石器から土器まで幅広い研究を行い、鹿児島県の考古学に精通する。鹿児島県の史跡の保存・活用に日々汗を流している。



鹿児島県の国史跡は現在まで24か所指定されています。その中で、塚崎古墳群や唐仁古墳群、横瀬古墳という高塚古墳を除けば、古い墓地遺跡の指定は初めてです。また種子島で最初の国の史跡となりました。実は鹿児島県では昭和34年～61年まで、新しい史跡の指定はありませんでした。ここ5年ぐらいは毎年指定されていますが、簡単に成るものではありません。有り難みが消えて、年々新聞の取り扱いも小さくなるようにも思いますが、史跡となる価値は、それぞれがわが国にとって重要な歴史的な価値を持っているからで、軽重はありません。通常指定へ向けて取り組んで、最低でも10年はかかると考えて良いと思います。

広田遺跡については、遺跡の価値付けについては、謎は多いものの、誰も異論のあるところではありませんでしたが、残っているかどうかが最

大の問題でした。実は、20年ほど前から課題となっていました。第1次から第3次の発掘調査の報告書について、木下尚子先生や天理大学の金関怨先生や熊本大学の甲元眞之先生などの諸先生方のご尽力により、平成15年(2003年)に刊行されましたが、これが遺跡への取組を前進させる大きな契機となったことは確かです。

しかしながら、それより前に文化庁の岡村道雄先生や、かつて文化財を担当していた坂口課長さんなどが、国庫補助による広田遺跡の調査の導入を13,4年前に検討しはじめました。また、関係者への聞き取り等を行っていました。今の石堂さんや徳田さんが専門員として採用されて、発掘調査となったわけです。発掘調査から指定まで、早かったように見えますが、最初の発掘調査時から考えると、関わられた人たちの想いを含めて、大変な積み重ねがあったことをご理解ください。



南摺ヶ浜遺跡(立石と土器)



## 遺跡の発掘調査からわかること

中村先生が広田遺跡と関連する遺跡をいくつかあげていらっしゃいますが、私の方でも気になる最近の発掘調査された遺跡をあげたいと思います。

ひとつは、指宿市の南摺ヶ浜遺跡です（写真1）。南摺ヶ浜遺跡は指宿市の鹿兒島湾に面した標高8mの海岸段丘に立地し、昨年の調査で、約2,000㎡の範囲に古墳時代前期の円形周溝墓12基、土坑墓74基、土器棺墓17基が検出されました。25枚の長さ1mの板石が発見され、検出状況から立てられていたものと判断されています。完形に近い土器が多く伴っています。この遺跡の発掘調査の成果で、従来旧山川町の成川遺跡という墓地遺跡が、国により発掘調査され、立石墓といわれていましたが、類例の少なさから、位置づけが大変難しかったところでした。それが、南摺ヶ浜遺跡の発掘調査で、こうした墓が薩摩半島の墓制として成立することや、墓制の変遷を解く大きなヒントとなりつつあります。時期的に広田遺跡と重なる部分があり、土器の完形品の供献や土坑墓などの共通性が感じられます。



写真2 トマチン遺跡石棺

もう一つは、鹿兒島大学の新里貴之先生が発掘調査している徳之島伊仙町のトマチンという遺跡です（写真2）。これは広田遺跡より古い縄文時代晩期後半～弥生時代前期ごろの埋葬跡です。

やはり標高14m前後の海岸砂丘にあり、積石の石棺墓が2基検出され、上部に礫群が乗っています。このような墓は、沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡の石棺墓群と類似しています。沖縄で遺跡としては点であった木綿原遺跡の石棺墓が、徳之島に繋がりました。多量の積石状の標石は、広田遺跡へ直接でないにしろ繋がってくるのが予想されます。人骨も見つかっており、広田人骨との比較も楽しみです。いずれの遺跡も海とのつながりを感じさせます（写真3）。



写真3 トマチン遺跡の下の佐弁の海岸

遺跡の発掘調査は、「宝物さがし」と見られがちですが、一つ一つの遺跡発掘の成果は、同時期の遺跡が、平面的に分布することから分かる当時の生活や風習・文化の広がりとともに、時代の前後で迎れたり分かたりすることもあります。土器をつなぎ合わせて、ジグソーパズルのように形とか文様を復元していくように、遺跡をつなぎ合わせて歴史や文化を復元する、このために小さな遺跡の発掘調査成果も大きな意味を持つこともあります。広田遺跡から、別の遺跡が見えてくるし、別の遺跡から広田遺跡の謎が解き明かされるヒントが見つかることもあります。

そうした視点でも、今回のパネルディスカッションをお楽しみください。

新里貴之「徳之島伊仙町トマチン遺跡の調査成果」『平成20年度鹿兒島県考古学会研究発表会』レジュメ



# 潮位上昇と高波浪の襲来から見た 広田遺跡の侵食要因の検討

宇多 高明 (海岸工学)

(財) 土木研究センター 理事なぎさ総合研究室長

建設省で河川や海岸の研究に長年従事する。  
日本各地に広がる海岸浸食の解決のため尽力  
している。



2005年9月4日には台風14号が種子島に襲来し、高波浪の作用により広田遺跡は著しく侵食され、遺跡が露出しました。台風の襲来直後の2005年9月7日には現地状況の写真撮影が行われました。そこでこれらをもとに侵食状況について検討したところ、既設護岸の天端を超えて越波が起きたため護岸背後の砂丘地が侵食されたこと、また護岸北端部が切れていたため護岸端部が集中的な波の作用で削られたことが明らかになりました。一連の侵食状況は、①護岸の天端高が低いための越波による侵食と、②護岸端部での波の集中による侵食とに区分されます。著しい侵食を生じさせたのは②です。護岸端部には広田川河口へと侵入する波が斜めに入射します。護岸で守られた部分では砂移動がないのに対して、護岸がない部分では波に晒されるため広田川の上流へと向いた強い漂砂が生じて端部を中心に大きく侵食されたと考えられます。

一方、台風時には海面がT.P.4.1mにまで上昇したことが分かっています。この場合、護岸天端との高さの差はわずか0.9mです。この高さでは入射波が容易に越波することになります。ちなみに護岸前面での入射波高が1mであったとしても護岸からの反射によって高さ2mの波が生じるから護岸を容易に越波することになります。護岸が砂に埋っていた場合には単に来襲波は砂丘を遡上し、また戻り流れとなって海へと戻ったのみでしたが、護岸の存在自体によって侵食を助長した面があります。護岸が既に造られていることからすれば、護岸撤去の案は検討しにくい。護岸北端部を途中で止めると、その端部が再び侵食される恐れが高いことから、上流まで巻き込んだ護岸とするのが現実的です。

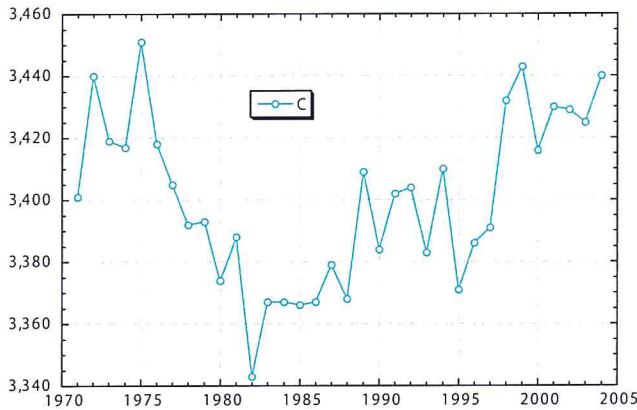
そのほかの要点は次のようになります。

1. 広田遺跡では激しい侵食を受けましたが、広田海岸だけでなく、南側・北側にそれぞれ約2kmと3km離れた大崎射場と浜田海岸でも同様に砂丘地の侵食が見られました。また広田海岸では近年の著しい侵食の起きた時期の直前に大規模な人工的改変は行われておらず、侵食が人為的要因に起因することはないことが確認されました。
2. 広田海岸の沖合にはリーフが発達し、高波浪時に wave set-up (平均水位の上昇) が起こり易い地形条件にありました。この点は2005年の台風14号襲来時に広田港の防波堤の天端(T.P.4.1m)まで水位が上昇したことから事実であることが確認されました。
3. 広田遺跡の過去の写真から、侵食は少なくとも1996年以降生じたことが確認されました。また2002年から教育委員会の遺跡発掘調査にかかわった徳田氏の証言によれば、2000年以前には侵食は顕著でなく、それ以降侵食が著しくなったということです。
4. 広田遺跡の周辺には過去護岸がありませんでしたが、昭和30年代に直立護岸(天端高T.P.5.0m)を造りました。この護岸は鉛直の壁体構造であって波返しを持たない構造であったために、越波が容易でした。また護岸が遺跡の北端で止められていたことによりその端部で激しい侵食を受けました。

これらを総合すれば、広田遺跡の侵食の主要原因は外的要因に求めざるを得ないと考えられます。そこで以下では、種子島周辺の潮位と波浪の出現頻度を調べました。

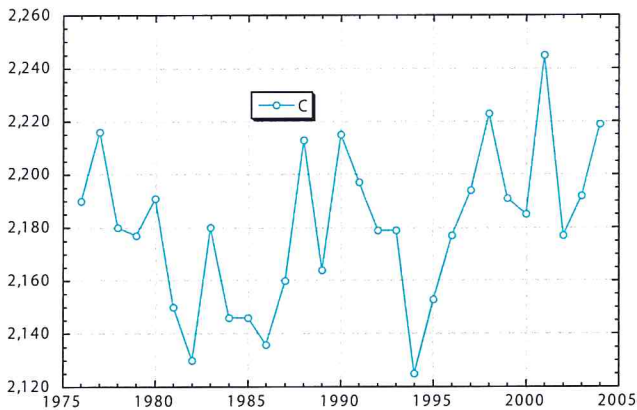
図-1,2は国土地理院による那覇と鹿児島県阿久根における年平均潮位の観測結果です。1994,1995年の潮位を除けば両者は良く似た潮位変化を示し、1980-1985年頃は平均的に潮位が低かったが、2000年以降潮位が高まっています。平均的に見ると、阿久根では約6cm、潮位上昇しました。広田海岸は沖合にリーフが発達しているために、潮位の上昇は危険側の変化です。ただ絶対値としてはそれほど大きくなく、むしろ後述するように波浪の変化のほうが大きなweightを占めています。

図-3は、国土交通省港湾局のナウファスによる奄美大島の名瀬における1995年から2004年の有義波高の経時変化です。有義波高は一般に冬季が高く、夏季には低いという傾向ですが、夏季から秋季に台風の襲来による高波浪が出現しています。仮に極大波として波高7mを考えると、7mを超える非常に高い波浪は、エルニーニョの発生した1997年に7.7mが1回発生したのみですが、2003年以降発生頻度が増し、2003年には7.5m、2004年には8.4mと8.0mという異常に高い波浪が襲来しています。このことから近年は台風の発生頻度や襲来のコースの変化によって種子島が過去にない高波浪の作用を受け、そのことが遺跡周辺での大きな侵食要因のひとつになったと考えられます。



阿久根/年平均潮位  
<http://cais.gsi.go.jp/cmdc/centerindex.html>  
 国土交通省国土地理院  
 地理地殻活動研究センター研究管理課  
 〒305-0811 茨城県つくば市北郷1番  
 TEL: 029-864-6277  
 FAX: 029-864-2655  
 e-mail: cmdc@gsi.go.jp

図-1 鹿児島県阿久根における年平均潮位



那覇/年平均潮位  
<http://cais.gsi.go.jp/cmdc/centerindex.html>  
 国土交通省国土地理院  
 地理地殻活動研究センター研究管理課  
 〒305-0811 茨城県つくば市北郷1番  
 TEL: 029-864-6277  
 FAX: 029-864-2655  
 e-mail: cmdc@gsi.go.jp

図-2 那覇における年平均潮位

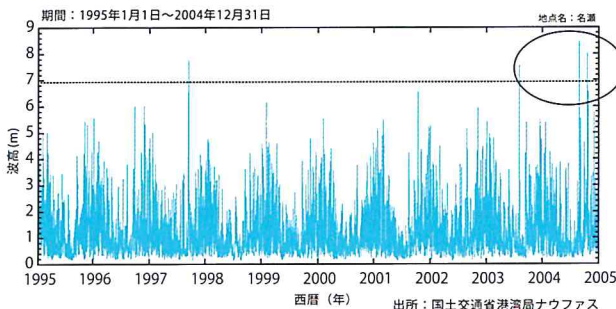


図-3 名瀬における有義波高の経時変化



# 広田遺跡の整備

高瀬 要一（史跡整備）

独立行政法人奈良文化財研究所 客員研究員

平城宮跡・頭塔など、全国各地の史跡整備を手がけてきた。文化財の保存と活用  
に精力的に取り組んでいる。



## 1 整備の目的

広田遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけてこの地域で生活した人々の墓地です。また、周辺では縄文時代後期から晩期の集落遺跡や中世の遺跡も見つかっています。つまり、少なくとも縄文時代後期からこの地域が人々の生活の舞台となってきたことをこれらの遺跡は物語っています。

広田遺跡の整備では、広田遺跡の内容とともにこの地域の縄文時代以来の土地利用を訪れた人々に理解してもらいたいと思います。さらに言えば、広田遺跡を訪れたことがきっかけとなって、この地域の歴史や文化に興味をもつことにつながれば広田遺跡の整備は大成功と言えるでしょう。

## 2 整備の基本方針

広田遺跡の整備では、まず第一に遺跡がこれ以上破壊されないように海岸線の保護を図る必要があります。ただし、保護すると言っても遺跡ですから歴史的景観に配慮した護岸にしたいと思えます(写真1)。



写真1 広田遺跡付近の美しい海岸風景

第二は墓地としての広田遺跡のあり方です。墓地と言うとどうしても暗いイメージになりがちです。弥生時代の墓地の整備例では福岡市の金隈遺跡(写真2)や山口県下関市の土井ヶ浜遺跡(写真3)が有名です。

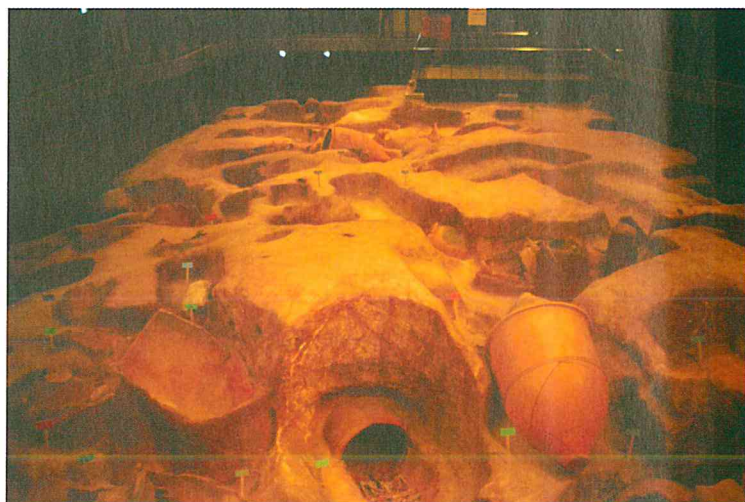


写真2 金隈遺跡の覆屋内部



写真3 土井ヶ浜遺跡の「弥生ドーム」内の展示(レプリカ)

どちらもお墓に覆屋を架けて埋葬施設や骨を見せています。遺構そのものを保存しながら見せるにはこの方法しかないので覆屋を建てていますが、覆屋はどうしても暗くなります。また、覆屋で公開する場合は常時管理する人が必要になり



### 3 最後に

ます。常に見学者が来ている状態であればこの方法もいいのですが、そうでないと維持管理の費用がかさみ負担が大きくなりすぎます。私見では「ご先祖様の明るい墓地」というイメージで整備するのがいいと思います。覆屋はやめて陶板に遺構のカラー写真を焼き付けたもので平面的に墓地のあり様を表現するののも一つの方法です(写真4)。

第三は遺構の周辺部です。ここは当時の環境、つまり植生や景観をできる範囲で復原したいと思います。

第四は目的のところでも述べたように広田遺跡を含むこの地域の歴史や文化に関する情報のエッセンスを伝える施設をどうするかです。ガイダンス施設を作ることができれば申し分ありませんが、無理な場合はあずま屋やトイレの壁面を利用したガイダンスコーナーを設ける方法もあります(写真5)。駐車場や見学園路の整備も必要です。

広田遺跡は種子島の財産です。どのような形がいいのか、どのようにしたら地域のひとびとの心のよりどころとなれるのか、この地域の人々の意見を集め、遺跡として風格のある空間となることを願っています(写真6)。



写真6 平成17年度 現地説明会の様子



写真4 東広島市三ツ城古墳陶板に遺構写真をプリントした整備例



写真5 群馬県高崎市の観音山古墳では、あずま屋の壁面を利用して案内施設としている



# 広田遺跡の保存と活用

棚宜田 佳男（考古学）

文化庁文化財調査官

弥生時代の集落や墓をとおして、その社会をさぐる。発掘調査指導から史跡整備・活用の指導と日本全国を奔走する。



## 1 広田遺跡の個性

広田遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代終末期に併行する時期、およそ3世紀から7世紀にわたる大規模な墓地遺跡です。

この時期、本州から九州にかけては、大和の地域を中心に各地で大規模な墳丘をもつ墳墓や古墳が築られました。古墳には三角縁神獣鏡さんかくえんしんじゆきやうをはじめとする銅鏡や、鉄製の武器・農工具、腕輪の形をした石製品など豊富な品々が副葬されました。各地域に出現してきた首長たちは、首長の死に際し共通の形をした墓を作り、そこで共通の葬送儀礼を行っていたと考えられます。

広田遺跡の墓地については木下先生の報告で明らかになったと思いますが、種子島より南の地域に古墳は作られませんでした。

古墳が作られなかったと言うことは、列島のなかで大和を中心とした政治体制に組み込まれなかったことを物語ります。しかし、土器には、これは中村先生の報告に出てくるとはいますが、南九州の影響を受けたものがあります。ですから、そうした社会との交流はあったことになりま

す。いっぽう、埋葬には当時の人々の死生観が表れていたと考えられます。古墳に副葬された三角縁神獣鏡には、「神仙思想しんせんししゆ」（不老長生を願う思想）の影響があったと考えられています。それに対し、



写真1 奈良県黒塚古墳 航空写真



写真2 広田遺跡 航空写真



写真3 黒塚古墳出土三角縁神獣鏡



写真4 広田遺跡 北区2号墓



貝符を副葬した広田の人々は、埋葬に際してどのような思いを込めていたのでしょうか？

南九州の弥生社会・古墳社会と交流を行いながら、独自の文化を築き上げていたことが窺える重要な遺跡。これが広田遺跡なのです。

## 2 日本の歴史の多様性を象徴する遺跡

学校の日本史で私たちは、「縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代……と社会は発展していった」と教えられてきました。しかし、日本の歴史はそういう単純なものではありません。大きくは、①北海道、②本州・四国・九州、③種子島以南の南島に分かれ、それぞれに独自の歴史を歩んできたのです。現在の学校教育では、②の地域の歴史に大半を割いています。しかし、日本人としては、三つの文化がお互いに関わりをもちながら歩んできたことを、しっかりと認識することが重要だと考えています。日本列島には多様な文化が育まれていたのであり、広田遺跡はそれを象徴する数少ない遺跡の一つなのです。

## 3 これからの広田遺跡

広田遺跡は、平成20年3月28日に史跡に指定されました。このことは、広田遺跡は南種子町が責任をもって未来永劫、この遺跡を保存していくということを意味します。

史跡となった広田遺跡を今後、活用していくうえで、皆さま方にいくつかのことをお願いしたいと思っています。

ひとつは、広田遺跡を地域の財産だとして、積極的に保存と活用に関わっていただきたいということです。全国にはいろんな史跡がありますが、史跡の活用がうまくいっているところは、住民の方々と行政ががっちりタッグを組んでいる場合です。具体的に何ができるのか。遺跡に来た方に広田遺跡のすばらしさを語ってもらうことをはじめ、できることはたくさんあると思います。

そのためには、まず広田遺跡を好きになっただけかなければなりません。そういう点で、今日

のような機会は大切です。広田遺跡には、まだまだ謎の部分が多いと思います。皆さま方が広田遺跡のことをもっと知っていただく機会、これは町が用意する必要があるでしょう。

今後、町は整備事業に取り組みます。まずは、高波や豪雨から遺跡を守らなくてはなりません。専門家がいろいろ議論することになるとは思いますが、そこにも皆さま方の意見が必要です。皆さんも今後どのような形で広田遺跡を守り活用していくのか考えていただきたいと思います。

最後は、この広田遺跡を地域以外の方々にも、知ってもらおう工夫をして欲しいということです。先ほど申しましたように、この遺跡は、日本列島が多様な文化をもっていることを示してくれます。そういう意味では、広田遺跡は、国内外を問わず全国の方々にアピールしていくことが重要です。広田遺跡だけで観光客を呼ぶと言うことは難しいでしょうが、ほかの遺跡や、豊かな自然、種子島の名物料理などと組み合わせ、観光部局や旅行会社などと連携して、この遺跡に、多くの人が訪ねやすい工夫をしていただきたいと思います。

史跡になった広田遺跡の将来はまだ無限の可能性があります。住民の皆さん、南種子町、鹿児島県、文化庁が緊密に連携し、この遺跡と一緒に保存し活用していきましょう。



写真5 広田遺跡について学ぶ子どもたち

写真1・3 奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳 調査概報』学生社 1999より転載



MEMO

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

発行日：平成 20 年 9 月 21 日  
編集・発行：南種子町教育委員会  
鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1  
TEL:0997-26-1111  
URL:<http://www14.synapse.ne.jp/minamitane/hirotaiseki/>  
印刷：(株)秀巧社印刷



